



というものに、多角的にアプローチできるお話ができるのではないかと思います。

さて、新潟県の佐渡には、講演も含めて4回くらい来たことがあります。私は能が大好きなものですから、室町時代の能役者であり能作者でもあった世阿弥の本をかなり読みました。その中に、佐渡島（さどがしま）に流刑された晩年の世阿弥が書いた「金島書」という本もありました。また、江戸時代の禅僧で詩人、歌人でもあった良寛のお母さんが佐渡の出身で、秀子さんという名前だったと記憶しています。私は、良寛も大好きで、かつて「東京良寛会」という会のメンバーでもあったものですから、こちらへ来て「ああ、そうだな。懐かしいな」と、いろいろなことを

## 特集 あんなニュース、こんなニュース 新聞記者という仕事

講師

●新井 光雄 氏

(エネルギージャーナリスト)

### ◆はじめに

ご紹介いただきました新井です。講演は月に1回程度していますが、エネルギーに関連した話をすることが多いものですから、一度、自分なりに新聞記者としてやってきた側面をお話しして、ニュースとは何かということを考える材料になる話ができたらなと思ひまして、今日は「あんなニュース、こんなニュース 新聞記者という仕事」というテーマにいたしました。

なぜこのようなことを考えたかといいますと、新聞社も組織ですから、入社してから退職するまで新聞記者をやり続けるのはなかなか難しいのですが、私の場合は幸いずっと編集局におりまして、新聞記者を続けることができました。入社したときの同期は30人くらいですが、最後まで記者を続けることができたのは、たぶん私一人だけだったと思います。そうした記者生活の中で、いくつもの部署でさまざまな経験をしてきましたので、ニュース

思い出しました。本日は、そんな思いのなかでお話を進めさせていただきます。どうぞよろしく願います。

### ◆原型をとどめなかった、初めての記事◆

以前、ある会社の社長さんから「新井さんはいいですね。自分で好きな職業を選んで新聞記者になったのですよね。うらやましいですね」と言われたことがあります。実は、私は新聞記者になりたくてなったわけではありません。また、なりたくないのになったわけでもないのです。大学の環境がそうだったのかなと思います。

私は、大学は文学部でしたが、文学部は概ね就職先がありません。学校の先生になるか、メディアに入るかでしょう。実際には学校の先生になった人の方が多かったみたいですが、私が入社試験を受けたのはメディアばかりで、放送局と出版社、そして読売新聞社でした。出版社1社と読売新聞社に受かり、何となく現場に近い新聞記者がいいのではないかと思って読売に入ったのです。1967年のことです。ですから、偉そうに社会の木鐸を気取って新聞記者を続けてきたわけではありません。結果としては、たいへん面白い職業であったわけですが、入った当時は決して楽しくやっていたわけでもありません。

新聞社は、入社しますと必ず全国バラバラに配属されます。読売新聞社はその当時、東京本社と大阪本社と福岡の西部本社の三つに分かれていて、私は東京本社に入社し、1カ月の研修を受けて秋田支局へ配属になりました。大学時代に旅行をしたことは全くなくて、せいぜい関東を知っているくらい。一番遠くへ遊びに行ったのが横浜で、家に籠った大学生だったので、入社して1カ月目でいきなり秋田へ行くことになったわけです。

素早い人ならすぐに赴任して、いいところを見せるのですが、私は「1週間以内に赴任すればいい」と言われていたものですから、病気だった父の見舞いなどしながらのんびりと1週間後に秋田に行きましたら、支局長にひどくどなられました。昔の新聞社は、まさに労働の現場というような意識がありましたから、胃が痛くなるくらい、本当にいやになつてしまいました。

その証拠にすぐに、記事を書けと言われました。5月1日でした。ちょうど花見が終わる頃で「いま千秋公園で花見が終わって掃除をしている。いかに市民が花見のときにゴミを出すかという記事を書いてこい」というのです。赴任して早々、朝の8時頃のことですが、写真を撮って話を聞いて記事を書けと言われても、千秋公園がどこにあるか知りませんし、まだ記事を1本も書いたことがないのですから、これは困りました。

仕方がないので、町の人に千秋公園はどこか教えてもらって行きましたら、支局長が言うように、一所懸命に掃除をしている女性がいました。それで、「ゴミがたくさん出ていますね。あまり行儀がよくありませんね」、そんな話を聞いて帰ってきて「ゴミがたくさん出ていました」といった20行か30行の原稿を書き、それから撮ってきた写真を焼いて記事にしました。

ところがデスクから、「ゴミが多いと書いているけど、どのくらいあったんだ？」と聞かれたのです。「ゴミはたくさんありました」、「どのくらいなんだ？」とやり取りをしていたら、脇にいた先輩の記者が、「市役所の清掃課に電話をして聞けば分かる」と教えてくれました。それで清掃課に電話して何トンか聞いたのですが、さらにデスクからは「何トンと書いても、読者には実感として分からないだろう。分かるような書き方を考えろ」と言われました。あの頃ですと、ドラム缶で何本分という表現にしたのですが、元の原稿はズタズタにされて全く原型をとどめない記事になりました。これが、私の第一回目の記事です。ただ、嬉しいことに当然ですが写真だけは自分が撮ってきたものがそのまま載りました。自分の記事が秋田版という地方版の片隅に載っただけの話ですけれども、生涯忘れない記事になりましたし、この経験が、「ニュースというのは、こんな具合にできるんだな」と実感するスタートになりました。

### ◆辛い思いもあり、嬉しい出会いもあった 警察回り時代

その後、配属になったのは、警察回りです。警察回りという言葉は聞いたことがあっても中身はよく分からないと思いますが、とにかく朝から晩まで事件・事故に付き合う仕事で、取材先は警察が中心です。

秋田では、県庁近くのアパートに住みましたが、びっくりするようなことがありました。皆さん、五つ子の赤ちゃんが話題になったのを覚えていますか。NHKの山下さんという記者のお子さんたちですが、実は、山下さんは同じアパートで、私の部屋の真ん前に住んでいたのです。五つ子ちゃんは、東京に帰ってきてから産まれたのですが、突然、仲間から、「山下さんから5人も産まれちゃった」という電話がありまして、これも秋田にいた頃の思い出の一つです。

警察回りは、かなり激しい仕事で、朝7時に起きたらすぐに県警本部へ行って、真夜中に起きた事件を全部取材して、それが終わったらバスに乗って秋田警察署へ行く。次は秋田駅へ行って鉄道公安、鉄道関係の事故の話を拾い、記者が何人か集まると食堂で朝食、

また県警本部に戻って、御用聞きのようにグルグル回る。それが終わるとお昼を食べて、今度は裁判所、検察庁を回るといった具合に、本当にニュースの御用聞きです。カッコいいことは何にもありません。本当に、ひたすら歩く。あの頃は全部バス利用でしたから、時間もかかります。それから締切りが早い。3カ月くらいで「もう辞めたい」と思ったくらい辛い思いをしました。しかし、だんだん慣れてくるもので、それはそれでできるのかなと思うようになりました。

秋田支局の頃の一番の思い出は、フランク永井さんに会えたことです。私も好きだった『有楽町で逢いましょう』という歌で芸術祭奨励賞を受賞されたフランク永井さんが、秋田のキャバレーに歌いに来ていたのです。キャバレーというのは踊れて、女性もいて、楽団も入っていて、なかなかハイカラなところですけども、その取材に行つて、フランク永井さんに会うことができたのです。丸ぼちやの、あの顔の感じのままの、いい人でした。そのインタビュー記事は社会面に載りましたので、全国の人、ひよつとすると、この中の人にもその記事を読んでいたかもしれない。この記事を書いたことで、何となく自信がきました。

それから、1968年に北海道で十勝沖地震が起こりました。函館市とか八戸市などで相当の方が亡くなって、青森市へ取材に行けと言われ、もう1人の記者と2人でタクシーに乗って行きました。不謹慎ですが、長い時間タクシーに乗れるのが嬉しくて、「優雅だなあ」と思っていたのですが、現地に着いたら、大変な状況でした。「十和田市がいま、壊滅的な状態になっているかもしれない。おまえは、そっちに行け」ということで、そのままタクシーを借り切つて行きましたが、道路にも被害が出ていて移動も本当に大変でした。こうした現場に立ち会えるのは新聞記者ならではのことで、震災に遭われた方には失礼な言い方になってしまいますけれども、興奮するような状態でもありました。

ところが取材をして、三沢市から原稿を送ろうとしたのですが、原稿を送る手段がありません。鉄道会社の回線か東北電力の回線を使わせてもらつて送るしか方法がないのです。あのときは東北電力の営業所から各新聞社が電話を奪い合いますようにして原稿を送りました。これも、被災者の方もいますし、亡くなった方も相当いますので、新聞記者が喜んでいてはいけません。何となく「社会的に役立つ仕事をしているのではないか」という思いもありまして、興奮していたことを覚えています。

当時、何が一番難しかったかというと、最近の新聞では少なくなりましたが、事故があると必ず顔写真を出しました。あの頃は、顔写真集めが一つの大事な新聞記者の仕事でし

た。地震のときも同じで、青森県の三戸で土砂崩れがあつて、何人かの方が亡くなり、その顔写真を必死になつて集めました。そんなことも秋田支局の警察回り時代の思い出として残っています。

### ◆企画ものの連載など、修行、を積んだ支局時代

こうして辛いことも多かつたのですが、だんだん慣れてきたなと思つた頃に、辞令がออกมาして、能代通信部に移りました。秋田県の能代市で、人口は4万人くらいの木材のまちです。まだ2年生記者ですが、支局から放り出されて、独り立ちして仕事をやるわけ、けつこう大変でしたが、これはこれでなかなか楽しかつたのです。

能代にいるときに結婚して、社宅に住みました。去年、その場所へ行つてみたら、もう社宅はなく駐車場になつていました。当時は電話も通信部にあるだけで、いったん通信部を離れてしまうと連絡ができません。私は当時、お酒をほとんど飲まなかつたものですが、行きつけの喫茶店を1軒つくつて、そこに入り浸つていたのですが、それでもなかなか連絡をつけるのは大変でした。いまは携帯電話がありますから、いつでも連絡がつきますし、電子メールで写真や原稿も簡単に送れますが、当時は写真を送るとなると、撮影し

たフィルムを自分で現像して焼いて、それを鉄道便で支局へ送つていました。いまと比べると、雲泥の差がありました。

能代通信部での仕事は一年間でした。その後、また秋田支局へ戻りました。支局は10人くらいで構成されていて、県政や経済、警察、大学、病院など、いろいろな担当があります。私は、経済の担当になりました。経済といつても地方の経済ですので、そう大がかりなものではなく、話題を拾つて歩くような仕事ですが、その経済の担当の後は県政、県の政治を担当して、市長選や参院選などの取材をしました。

それと同時に、長い企画ものの連載を任されて「秋田の酒」という企画をやりました。100回くらいにわたる連載で、取材をしたり調べものをしたりして、いろいろなことを解き明かしていくのが楽しかつたです。例えば、江戸時代後期くらいのお金持ちの人が、毎晩どれくらいお酒を飲んだか調べたら、これが分かつたのです。当時の大福帳、掛け売りの帳面が残っていて、一人の人をずっと2カ月くらい追つていつて計算すると、一晩に3合くらい飲んでいたので、杜氏（とうじ）がどうやって温度管理をしたか、その苦労話を書いてあるのです。「裸足になつて水の中に足を突っ込んでみる。こんな感じになつたら酒を

つくり出す」とか、いろいろなことが書いてありました。

もう一つ興味深かったのは、お酒がいつからあったかが意外に分からないことです。容器を調べて、これはお酒を入れたものだろうとは言えても、お酒があったという文献の証拠を探すととなると、なかなか難しいのです。しかし秋田の場合ですと、室町時代にお酒は絶対にあつたはずで、それで税金に目をつけて探したら、お酒の税金の古文書が残っていました。それで証拠が上がりまして、秋田の酒造研究所の方と「これは面白いですね」と話したことを覚えています。やはり税金というのはすごいものだなと思いました。

支局時代には、こんな具合にいろいろな修行をして、新聞記者としてのスタートを切りました。この段階でくじけてしまうと、本当に挫折してしまうのですが、とにかく「記事はこう書け」ということを、いやになるほど繰り返し教えられたわけです。よく人から、「この原稿を100行で書いてくれと言われて、よくぴつたりの行数でまとまりますね」と言われることがあります。また、現在は、月に6本の原稿を書いています。題材が決まれば、原稿用紙4、5枚ですと、1時間くらいで書き上げることができます。これは、支局時代からの訓練の賜物なのでしょう。

### ◆記者としての運命が決まった、石油ショック

秋田で結婚をして、子供もでき、その後、東京本社に移りました。東京では地方部の整理という業務につきました。いまは整理という言葉は使わず、編成と呼んでいます。いわば新聞の紙面をつくる仕事です。記事に見出しをつけ、記事を並べてデザインするセクションです。ここで1年間、働きました。

その後、いよいよ取材部門へ戻れることになりました。政治部や社会部、経済部、運動部、生活情報部、文化部など、いろいろなセクションがありますが、会社の都合で決めることで、自分で選べるわけではありません。私は一応、社会部を希望したのですが、社会部は人気があつて選んでもらえず、経済部に配属されました。

ところが、行って見たらけっこうやりやすいところでした。というのは、経済部ではあまり人間を扱わないのです。経済事象、数字を扱うセクションです。秋田支局にいたときは、常に人が絡んでいました。交通事故でも犯罪でも殺人事件でも、人の話が多いわけです。といつても、秋田にいた間に殺人事件はほとんど起こらず、私が担当したのは1件の強盗殺人事件だけで、それでも人が常に絡んでいますので、記事を書くときには、人権の

1973年の第一次石油ショックにより「トイレットペーパー事件」という大変な混乱が起きました。



問題などに気を使う必要があるわけです。経済部は、その点、少し気楽だったということでした。

その経済部時代の1973年10月に、第一次石油ショックが起きました。これで、私の運命が決まってしまったのです。どういふことかという点、あのとき日本は大変なエネルギー危機に見舞われましたが、新聞社もそれまで見向きもしなかった「エネルギー問題」に大きな関心を持つきっかけになり、私に「なるべくエネルギー問題をずっと見ていてくれ」という上司からの指示がありました。もちろん、エネルギー問題だけをやっていけばいいということではありませんが、そこから離れないようにしてくれということ、それ以来、ずっとエネルギー問題に関わり、いまでも「エネルギージャーナリスト」などと名乗っているわけです。

第一次石油ショックによって大変な混乱が起きました。

た。トイレットペーパー事件」というのを覚えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実は、うちのかみさんも巻き込まれて、押入れの半分くらいのトイレットペーパーを買い集めてしまいました。あの当時、東京のマンション暮らしでトイレットペーパーがないというのは致命的なことで、生活ができなくなってしまうと、かみさんも一所懸命になってしまったようです。このように、エネルギー危機が生活にも大きな影響を及ぼし、大変な状況を招くことがあると分かり、「エネルギー問題をずっと見ていてくれ」という指示が私に下ったというわけです。

### ◆興奮状態に入り「一気呵成」に突き進んでしまふ、日本の新聞

東京の取材では、「夜回り」が大変でした。毎日毎晩、ずうつと続けなければいけません。いまでも同じだと思のですが、毎晩のように、どこかの社長の家や重役の家、あるいは大臣の家など、とにかく夜回りと称して誰かの家に行くのです。いまはちよつと時代が変わって、家に上げてもらうのは難しいようですが、あの当時は非常に優しく、確率5割くらいで家に上げてもらえました。そうすると何か義務のような感じになって、それを続けるものですから、疲れてしまいます。

これもまた、新聞記者を「イヤになっちゃうな」と思う面なのですが、第一次石油ショックのようなきには、何を書いても、どんなことを書いても、新聞に載ります。いまの豊洲市場の問題も同じです。豊洲に関わることなら何でも、テレビも新聞もニュースとして取り上げる。どういうものか、みんなそういう心理状態に追い込まれているのだと思います。「問題があるのではないか」という思い込みがあり、何を書いても全部がニュースになってしまうのです。豊洲問題を一番大事な「安全性はどうなんだろう」という視点から見直すと、ちよつとおかしいのではないかと思うくらい、さまざまなニュースが溢れまわっていると思います。

日本の新聞には、このように「一気呵成」にどんどん突き進んでしまうところがあつて、第一次石油ショックのときには、私も「とにかく何でも書いてしまえ」というような勢いで書きました。これもまた、一種の興奮状態で「新聞記者は面白いな」と思ってしまったのですが、その後の第二次石油ショックのときには反省をしました。しかし、新聞記者はどんどん変わっていきますから、新しい新聞記者、新しいテレビの報道マンは同じように興奮して大きな波の流れに飲み込まれていってしまう、ということだと思います。

ですから、ぜひ注意していただきたいのは、大きなニュースがドンドン大量に流れてきたら、一歩引いて「どれが本当のことなのだろうか」と、頭の中で整理をする必要があるということ。私自身も、ニュースを発するよりもニュースを受ける機会が増えていて、自分でも注意しなければいけないと思つています。

ただ、なかなか難しいのです。やはり調子に乗ってしまうところがあつて、東京都知事だった舩添要一さんに政治資金支出などを巡る公私混同の問題が出たときには、私もかなり非難をしたのですが、よくよく考えてみると「ちよつとやり過ぎたかな、約50億円をかけて選挙をやるようなことだったのかな・・・」と反省しています。こういうところが、ニュースの難しさだと思います。

#### ◆外国での取材や特派員として、海外での貴重な経験

石油ショックがあつたおかげで、いろいろなことを経験できました。また、石油ショックと同時に、あの時代は、世界的には食糧危機でもありました。それで、食糧危機の企画記事の担当になり、初めて外国へ取材に行くことになりました。

実は、その前に中国へ行く機会もあつたのですが、実現しませんでした。中国の広州で年に2回、広州交易会というものが開かれていて、そのときだけは新聞記者が比較的楽に



中国へ入れたのです。ところが、私が中国大使館に申し入れても、どういうわけかビザが出ないのです。これは私に対して出ないのか、会社に対して出ないのかは分かりませんでした。当時の中国という国は、とても複雑なところで、ちよつと気に入らないことがあると新聞記者を北京から追い出したりすることもあったのです。

食糧危機の企画で最初に取材へ行ったのは、インドです。夜中の3時頃に着きまして、8月でしたから気温が40℃以上と暑かったのですが、足が震えました。飛行機から降りたら、真つ暗だったのです。空港の広さは羽田空港くらいあるのですが、電気がついていないのです。なぜかと思いましたが、中国とインドの中印戦争が終わってすぐの時期だったため、空港は非常に危ない場所だったのです。我々が着いてからようやく電気を点けてくれましたが、黒装束の人（武装した兵士）が並んでいて「これは恐ろしいところに来てしまった。タクシーも全然見当たらないし、どうしよう」と思っていたら、日本人のスチュワーデスの方がいまして、「同じホテルのようですから、よかつたら一緒に行きましょう」と言ってくれて、ホテルへ行き着くことができました。それでホツとしましたが、とても強烈な思い出として残っています。

インドから、バングラディッシュ、タイ、インドネシア、シンガポールと回ったのですが、特にバングラディッシュは、その貧しさが印象に残り、自分にとっては忘れられない海外取材になりました。

その後も外国に行くチャンスが与えられまして、いままでに60カ国くらい行っています。いろいろなところを見られたことも新聞記者になってよかつた点です。基本的にはエネルギー記者という道筋を与えられたのですが、実際には外務省へ行ったり、日本銀行に行ったりもして、39歳の頃に外報部に移りました。いまは国際部と呼んでいますが、こうして特派員としても外国へ行くことになったわけです。

行った先は、ブリュッセルです。ベルギーの首都ですが、当時はまだ外国というものがそんなに身近ではなく、ブリュッセルも一般にはあまり知られていない時代でした。このブリュッセルで、3年半を過ごしました。いま、欧州連合（EU）には28カ国が加盟していて、本部がブリュッセルにあります。当時は欧州共同体（EC）の時代でしたが、このECに加盟していた12カ国の経済動向を探って記事にするのが、主な仕事でした。

ところで、ブリュッセルでは何語を話しているかご存知でしょうか。日本語に当たるベルギー語というものはなくて、フランス語とオランダ語とドイツ語の三カ国語です。現地の方は、フランス語をワロン語、オランダ語をフラマン語と呼んでいました。特にブリュ

ッセルは、言語境界線のちょうど真ん中にありまして、北ではオランダ語、南ではフランス語、そして真ん中のところでは両方が使われていました。このように非常に複雑な社会構造ですが、なかなか面白い体験ができました。

その頃、いまの皇太子、浩宮さまがロンドンに留学をされていました。いまの天皇皇后両陛下がまだ皇太子、皇太子妃の時代で、お二人がブリュッセルへ来られて、浩宮さまとブリュッセルの空港でお会いすることができたのです。外国は規制が非常に緩くて、我々記者も飛行機のそばまで行って、浩宮さまが両陛下をお迎えするシーンの脇に立っていることができました。ある程度の距離はありますがそれでも「記者がこんな間近で拝見しているのかな」と、私なりに感慨を持った場面でした。ですが、皇室の取材はなかなか難しいのです。随行記者がいますから、私は原稿を書かなくてよく、ただ記者会見に顔を出すだけです。その夜、ベルギーは古楽器が有名なので、それを使ってご三方で演奏会が開かれたそうです。記者会見では、飛行機を降りてきて最初に妃殿下が浩宮さまにどうい言葉をかけられたのかと記者が聞くと、「それは教えられません」と教えてくれないのです。「お元氣でしたか」くらいでしょうから、そのくらい教えてくれてもいいと思うのですが、だめでした。古楽器の演奏会についても、「どんな曲を演奏されたのですか」と聞いても、「そ

れも言えないのです」という広報担当者の記者会見でした。これも新聞記者をやっていないと分からないことで、面白いところを垣間見ることができたと思っています。

ベルギーの王室は庶民的です。ベルギーの国王は、そもそもはドイツ系の方で、ドイツからイギリスへ行き、イギリスの王家からベルギーの王さまになった方です。国王もいま5代目くらいですから、市民との間に隔たりが少ないのかもしれない。私ごとき外国人の新聞記者にも、前国王のお嬢さんの結婚式の取材招待状が来るのです。これには、本当に行つていいのかとびつくりしました。教会で式を挙げられたのですけれども、日本の皇太子さまが参列されています。それを教会の隅から拝見しました。これも、新聞記者だからできた貴重な体験でした。

### ◆日本の「平和ボケ」や、「ヨーロッパ」での日本の評価を実感

ベルギーでは、先ほど申し上げたように、主にEC12カ国の経済動向や日本との関わりなどを取材していましたが、当時は旧ソ連と西側の東西対立が激しく、北大西洋条約機構（NATO）本部がありましたから、軍事問題も重要な取材でした。これも、いろいろ考えさせられました。日本はよく「平和ボケ」をしていると言われますけれども、それを実

感せざるを得ませんでした。また、ベルギーにいるときに、外国人の記者から「おれたちは日本人とロシア人が大嫌いだ」と言われました。なぜ嫌いかというと、「ロシアは地続きでいつ攻めてくるか分からない。日本は良いものをつくって、どんどんヨーロッパに入ってきて経済侵略をしている」と言っていました。

当時、ポアチエ通関問題というものがありました。「日本のVTRは、フランスの田舎町のポアチエというところではか通関しません」というものです。日本でいえば「フランスのワインを日本の小さな田舎の港町でしか輸入しません」ということです。そういうことをやってのけるところがありまして、日本にいると何となくヨーロッパは偉い国だなどと思いがちですけれども、必ずしもそうは言えないというのが私の実感です。

特派員時代に一番動揺したのは、1985年に日本航空の飛行機が御巢鷹山に墜落する事故が起こったときです。私は休みで、スイスの山に行っていました。ブリュッセルから車で行き、ラジオでニュースを聞いていたのですが、ドイツ語なので、日本の飛行機が落ちたことくらいしか分からなくて、どこに落ちたのかなど詳しい状況が、私は全く分からないわけです。翌日の新聞を見て、詳細を知り、事の重大さに驚きました。私は、「ベルギーとオランダとルクセンブルクの3カ国について、ニュースを追いかけなさい」と言わ

れていて、オランダに関連するニュースで長崎県の佐世保市にハウステンボスをつくる動きがあった、「船ができたから見に来てください」とか、いろいろ招待状が来たりしていたのですが、御巢鷹山の事故は、ちょうどその頃のことでした。

通信手段も、ブリュッセル時代の忘れられない思い出です。原稿は全部ローマ字で書いて、テレックスで送るのです。皆さん、テレックスをご存知でしょうか。細いテープに穴を開けて、それを機械にかけて送るといふやり方です。東京本社では、それを機械にかけてローマ字を日本語に直します。これでやつかいなのは、名前です。漢字を説明しなければならぬからです。例えば私の名前なら、アライのアラには「新」や「荒」などいろいろありますから、「新しいのアラ」というように説明を入れないと、ローマ字では名前が正確に伝わらないので、これをせっせとやるわけです。いまならパソコンで打って、ポンと押したら、電子メールであつという間に日本の編集デスクのところに着いているでしょう。あの頃のテレックスは、大変だったのです。

ところが、ブリュッセルから送る記事は8割がボツで、新聞に載せてもらえませんでした。いくら書いても、よほどの出来事であればニュースにはならないということ、だんだんやけになって、早く日本に帰りたいと思うようになりました。

その頃、ワープロが出てきて、日本からワープロの手紙をもらいました。もらったときは「何でこんな私事をわざわざ印刷して」と不思議でした。「ごちそうになったアムステルダムのおそのレストランの食事がおいしかった」とか、そんなことを印刷してどうするつもりだと思っていたのです。東京に帰ってきてから「文字がプリンターから印刷されて出てくる、ああ、これがワープロか」と、やっと分かるのですが、ブリュッセルにいた3年半の間に、いろいろなことが変わっていました。

### ◆帰国した日本はバブル経済の入り口で、日本人に大きな変化が

帰国後は経済部にまた戻ったのですが、日本が大きく変わり、お金持ちになってきたことに驚きました。ちょうどバブル経済の入口あたりの時代です。日本に帰ってきてすぐに「兜町担当だ」と言われ、行ってみたらすごかったです。とにかく株価が毎日どんどん上がっていたのです。私が経済部にいた間に、株価は2倍くらいに上がったのではないのでしょうか。

日本経済新聞は経済産業紙ですけども、そうでない朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、読売新聞も、経済関連の新しい紙面をつくったり、新しい新聞を出したりしました。読売

新聞の場合は、家庭経済新聞という新しい新聞を出しました。個人のお金に目が移っていき、大変な時代変化だったと思います。今となれば新聞社も煽ってしまったということでは反省しなければいけないかと思うのですが、時代というのは怖いもので、動き出したらどんどん加速してしまう。

それと、一般の人たちも新聞記者も、人前でためらいなくお金の話をするようになっていて「日本人は変わったなあ」と思いました。日本人はどちらかというと、お金の話を人の前でしないのが慣習といえますか、礼儀だったのではないかと思うのですが、それがガラリと変わり、お金の話、株の話をどんどんするようになったのです。私は兜町の担当ですから株は身近なものでしたが、誰もが株の話をしているのには、正直、びっくりしました。ほかに、週刊誌などに女性の裸の写真が載るようになったことや、きちつと真っ直ぐなキュウリばかりが売られていることにも驚きました。

なぜこんな話をしたかという、日本に帰ってきてから3カ月くらい、毎日のように歓迎が続いて、挨拶のときに決まって「おまえ、いまの日本をどう思う？」と聞かれたのです。それで、言いたいことを言ってやろうと思ひまして、「簡単にお金の話をするようになりませんでした。昔は、新聞記者はお金の話なんて絶対しなかったでしょう。もちろん予算

いま原油価格は市場が決めますが、以前は石油輸出国機構(OPEC)が決めていました。



の話とか、そういう話はしますが、個人のお金で、株で儲かったとか損したとかいう話はしませんでした。それから女性が簡単に雑誌で裸になっていきます」と、よく答えていたのです。キュウリについても、日本のものは上等すぎて、長さも太さもそろっているのは、ちよつと異常ではないのかなとつけ足したのです。

その後、エネルギー記者クラブへ行って、原子力の話、石油の話など、エネルギー関連の記事も書きました。これには、海外での経験が活きました。サウジアラビアなど中東を中心とした産油国で構成される石油輸出国機構(OPEC)の総会に、それまで10回くらい参加して取材をしてきたからです。いま原油価格は、市場が決めるようになりましたが、当時はOPECが原油価格を決めていましたので、その取材記事は絶対に一面トップになる重要な記事の一つだったのです。実はこのOPEC総会が大阪で開かれ

たこともあったのですが、そのときは、OPECにあまり力がなくなっていたため、大きなニュースにはなりませんでした。

しかしこの経済部にも、会社は長くは置いてくれませんが、今度は「電波報道部に行け」と言われました。この部署はもうなくなりましたが、ラジオとテレビを担当する部署です。ラジオ放送はやっていなかったのですが、新聞社の中にスタジオがありまして、たかだか真夜中の7分間と午後3時頃の7分間ですが、テレビの放映をしていました。新聞とは異質ということではなくて、午後3時頃、そのときにでき上がった夕刊を紹介し、夜中の1時頃に次の日の朝刊を紹介する、というテレビ放送で、そこで1年間、デスクをやりました。

デスク稼業といっても、しゃべる人の脇に座っていて、間違えないかどうかチェックすることと、テレビ番組を企画することが主な仕事で、何度か街頭にも出て出演しました。これはちよつと辛かったです。新聞記者として書くのは慣れていますが、人の前で話すことに慣れていませんし、恥ずかしいのです。いまでも話すのは、うまくいっていないところがあるかもしれません。この人事は明らかに左遷だと思いました。

行きたくない部署へ行ってテレビに出て、1年がたった頃、幸運なことに経済部へデスクとしての辞令が出て、またまた経済部へ戻りました。今度は書く記者ではなくて、記事

を取りまとめる側のデスクです。デスクというと特別なことをやるような感じがしますが、その日の原稿を取りまとめる役ですから、普通の記者がやってもかまわない仕事です。デスクはだいたい次長がやることになっていて、私も經濟部次長になりました。

それから、5年間ほどの經濟部次長の生活が始まります。これも大変でしたが、面白い仕事でもありました。デスクは5人いて、1番手は朝の9時に入社して、夕刊をつくり、3時頃に終えて解放になります。その間の12時頃に2番手のデスクが来て、翌日の朝刊の準備をします。3番手は夕方の5時頃に来て、朝刊をつくりまします。彼が夕方の5時から朝の3時くらいまでずっとデスクを担当します。

経済面は3面あって、600行くらいの原稿を一人のデスクが見ます。書いている記者は60人くらいです。デスクが絶対的に偉いわけではありませんが、この記事は1面に出そう、この記事は経済面の頭でいこう、これは第2経済面にしようなど、全体の構成を考えながら原稿を見て、チェックをするのがデスクの役割です。これを5人でやっていましたから、朝出る、昼出る、夜出るで、次の朝は明け休みになります。その次の日は公休で休みなのですが、実際のところ新聞記者に休みがないのは当たり前でしたから、ほとんど休んだことはありません。

これは余談ですが1年目の大晦日、夜のデスクが私の番になりました。「元日は家で迎えられないんだな」と思っていたのですが、次の年もまた大晦日の夜、デスクが私に回ってきたのです。どうしてなのかなと思ったら、1年365日は5で割り切れる。つまり、デスク5人で回しますから、大晦日の夜のデスクは必ず私の番になるのです。これは不幸なことと言えば不幸なことですけども、逆に言うところ「毎年、元日号の紙面づくりに担当デスクでいたのだから、いいのかな」と、いまではいい思い出になっています。

### ◆優秀な女性記者の進出、活躍の時代へ

この時代が一番大きな変化は、女性記者が増え出したことです。まだ走りでしたから、そんなに多くはおりませんでした。その後、どんどん増えました。私の同期30人近くの中には一人も女性記者はいなくて、10年目くらいに1人、それから5年くらい後に1人といた程度でした。いまは、たぶん3分の1くらいが女性記者になったのではないでしょう。か。それに、秋田や山梨などで女性が支局長に就きましたし、ワシントンなどの海外特派員や支局長も女性がやるようになっていきます。

このように、いまは女性が大活躍ですが、当時は、それまで男性社会でやってきたもの

ですから、女性記者をどう扱ったらいいか困りました。優しくしたほうがいいのか男性同様に厳しく接したほうがいいのか、よく分からなくて、デスク同士でけんかになったこともあるくらいです。

特に難しいのは夜回りです。先ほど、大臣の家や会社の社長の家などに行っても、当時比較的に家に上げてもらえたと申し上げましたが、女性記者の場合、家に入った後で運転手が心配になってしまうのです。自分の娘くらいの若い女性が人の家の上がって、長時間出てこない。そうすると、私のところに電話がかかってくるのです。「新井デスク、家に入ってもう4時間になるんですけど、どうしたものでしょうか」と聞かれるのですが、これには私も困りました。まだ携帯電話などない時代でしたから、「じゃあ、出てくるように呼び出して」ということも、簡単ではありません。「立派な社会人の女性なのだから、まあ、じっと待とう」みたいな感じでした。女性記者と取材先とのトラブルもないわけではない時代だったので。

いまは違うと思いますし、女性記者は有能ではないということを使うつもりは毛頭ありませんので、誤解のないようにしてください。事実、毎日新聞の女性記者が2年連続で新聞協会賞を取るなど、女性記者は非常に優秀です。

ブリュッセル時代の他国の女性記者の話を一つしておきます。あの当時はソ連の書記長が亡くなると一面トップの扱いで、1982年にブレジネフ書記長が亡くなったときは、日本の通信社が世界に先駆けて特ダネとして報じました。これは、北京の特派員がソ連の外交筋から聞き入れて、世界へ発信したものです。ブレジネフの次に書記長になったのは、ソ連国家保安委員会（KGB）の議長をしていたアンドロポフで、恐ろしく過激な人です。この人の死亡が、1984年に何とブリュッセルで分かったのです。

実は、その前日、モスクワのテレビ放送でアイスホッケーの試合が突然打ち切りになって、音楽の放送に変わったため「何か大きな事件などが起こっていることは間違いないから、注意しろ」という警報が、テレックスで私のもとにも届いていました。しかし、アンドロポフ書記長の死亡がベルギーのブリュッセルで分かるとは思っていませんでした。ブリュッセルでは、そのときアフリカとECの間で国際会議が開かれていました。朝の9時頃、フランスの外務大臣が挨拶のなかで、1分間の黙祷を捧げたいとして書記長が亡くなったことをしゃべってしまったのです。彼は、ソ連が正式に発表することを知っていたのですが、すでに発表されていると勘違いしたようです。わざとやった可能性もありますけれども、こうしてブリュッセルの国際会議で、アンドロポフ書記長が亡くなったこと

が分かったのです。

アフリカとECの会議ですから、日本人記者は誰も行っていません。でも、現地の女性記者はきちんと行ってたのです。それも特ダネをかけていますから、ロイター通信社とフランス通信社（AFP）の女性記者の何十秒という単位の抜き合いだったらしいです。新聞記者は、とにかく他の新聞社に負けないように特ダネを書きたくてしょうがない。それで、その女性記者二人がこの特ダネを抜きました。私も、まじめにその会議に行っていれば、ひよっとしたら新聞協会賞をもらえるくらいの特ダネを書けたかもしれません。女性記者二人は、どちらが何秒早かったかということを言い合っていました。ロイターのほうがちよつと早かったかもしれませんが、いずれにしましても、女性記者は優秀なのです。

#### ◆編集委員、大学の講師なども務め、視野がより広がる

この経済部のデスクも長くはやっていられませんので、次は解説部に移りました。デスク時代はほとんど原稿を書くことがありませんでしたが、解説部は解説面という面を持っていますから、また原稿を書けるようになりました。当時の解説面は一面あつて、1週間に1本か2週間に1本くらい、解説記事を書きました。専門的にエネルギー問題をやつて

いればいいということですから、非常に楽しい職場だったと思います。

しかし、会社はそんなに楽をさせてくれません。「解説部は楽そうだから、新聞監査委員をやってくれ」となりました。いまはちよつと縮小したようですが、読売新聞の新聞監査委員というのはものすごいのです。記者経験のある15人くらいの委員が毎日、読売新聞の記事を読んでチェックをします。一面は全員が読んで、私は経済面ですけれども、政治面や婦人面、文化面などを、それぞれの委員が担当します。そうして品質管理のような視点で記事を読み、毎日30分間、現場のデスクと「この記事はいい」、「これは悪かった」、「あの記事は、こう直した方がいい」、といった話をするわけです。これはこれで、なかなか面白い職場でした。

それと同時に、ラジオやテレビに出ることもなりました。ラジオは毎週1回、3年ほどやりました。新聞から拾っておいた話題などをもとに、女性のアナウンサーと経済情勢などについて電話でやり取りをするというものでした。テレビは1カ月に一回で、エネルギー担当だったものですから、エネルギー関連の研究の人とか学者さんなどへのインタビューを5年くらいやりました。

この間も解説部を兼任していましたので、1カ月に1本くらい原稿を書き、新聞監査委



員をやり、テレビのインタビュアもやり、という具合で過ごしました。

すると今度は、「いろいろやるのは大変だから、編集委員になれ」ということで、編集委員になります。58歳くらいになっていました。「原稿は書いてもいいけれど、無理して書かなくていいです」という感じで、これは極楽というか、地獄というか、どちらにもとりようがあります。いま編集委員は多いのですが、当時は10人くらいで、原稿を書けば逆にいやがられてしまうようなところもあって、せいぜい2カ月に1本くらい何か自分の気がついたものを書いていました。それと、新聞の紙面を一面もろうことができ、1カ月に一回、「エネルギーを考える」といった企画記事を書かせてもらいました。それが私の財産になっていると思います。

また、いろいろと対外的な経験も増えました。読売新聞は、大学で講座を持つことは許されてきました。それで、50歳の頃から中央大学で始めたのを皮切りに、幾つかの大学で教壇に立つことができました。国の関係でも、総合資源エネルギー調査会の委員や原子力委員会の専門委員などもやらせてもらい、視野が広がったと思います。

それから、国会での意見陳述も経験しました。私のような者にも意見を聞いてくるのかと驚いたのですが、衆議院の商工委員会で見聞陳述をさせてもらいました。一つは石油業

法を廃止することに関わる意見陳述、もう一つは石油公団を廃止することに関する意見陳述です。日頃は取材する側にいるのに、取材される側になって意見を述べたのは、非常に緊張しましたけれど、なかなか興味深い体験でした。もともと私の意見陳述など取材する人は一人もおりません。業界紙の方が2、3人来ていて、撮った写真を後でもらった記憶があります。

秋田支局の時代にフランク永井さんにお会いできたように、やはり「新聞記者をやつてよかつたな」と思うのは、多くの人に出会えたことです。個人的に話したことがあるという意味では、例えば、通産大臣をされていたときの中曽根康弘さんとは何度もお話していますし、総理になられてからは無理ですが、竹下登さんとも大蔵大臣のときに話をしています。宮澤喜一さんが外務大臣のときには、私も随行して海外へ行き、話す機会がありました。「新聞記者は、お金をもらつていい経験をさせてもらつてきた仕事だったかな」と思っています。

### ◆情動が走り出すと危険、報道は冷静に読む必要がある

しかし、いろいろな意味で、報道には問題もあります。先ほども申し上げましたが、石

油ショックのときのよう、報道というのはいったん動き始めると強烈な速さで走り出します。いまの豊洲市場の問題もそうだと思いますし、東京都知事を辞職した舛添要一さんの政治資金の支出に関わる問題もそうだったのではないのでしょうか。

その選挙で、小池百合子さんが東京都知事に選出されました。実は、石油ショックのときに、私は小池さんのお父さんに会ったことがあります。小池さんのお父さんは中東関連の貿易商でエジプト原油の輸入に関わっていました。一度、お会いしたことがあるのです。小池さん自身にも、彼女がまだキャスターになる前、ある石油会社の私設秘書、通訳をされていたときにお会いしています。その石油会社の部長さんに、「面白い女の子がいるから一緒に食事しませんか」と誘われ、お茶の水のレストランで一度だけ食事をしたことがあるのです。小池さんが都知事に決まった日の朝、その元部長さんから「小池さん、やりましたね」と電話がありました。これも新聞記者をやっていたことがきっかけの奇遇な出来事でした。

ここで、「メディアとは何か」ということを少しお話します。報道はやはり冷静に読まないといけない。かつて産経新聞が、「新聞を疑え」というコマーシャルをやりました。逆説的な宣伝です。冷静に疑わなければいけないということです。報道は全部そうですけ

れども、情動的な文章と理性的な文章と両方があります。怒りや恐れといった喜怒哀楽の感情、つまり情動が走り出したときは、ものすごく危険です。どんどん拡大していつてしまいます。

いまの豊洲市場の問題も、安全であるかどうかという視点に振り返って報道をすればいいのですが、地下に水があつたというだけで、ものすごく危険だということになってしまっています。原子力の問題も同じように、ちょっとでも放射線の問題が起ると、それがものすごい問題のようになってしまいます。そういうときこそ、冷静な目で見なければいけないと思います。

秋田支局時代に、私が最初にショックを受けたのは、朝日新聞の記者の書いた記事でした。小学3年生くらいの女の子が自動車にはねられて、全治2カ月〜3カ月の怪我をしました。あの頃は、交通事故が少なかつたので、それでもニュースになったのです。私は単に「小学3年生が自動車にはねられて怪我をした」といった記事を書いたのですが、朝日新聞の記者は本当に優秀でした。どこがミソかというところ、「おばあさんのお見舞いで急いでいたので」という一文が入っているのです。そうすると、記事が大きくなって3段です。私の記事はベタです。もちろんお見舞いに行ったのは事実ですから、それはそれでいいの

ですが、こうした捉え方を過剰にやっていると、情動的なニュースになってしまいうわけです。三重県の和菓子屋さんか、お饅頭の賞味期限を改ざんしていたと、大きなニュースになったことがあります。あのとき、たまたま名古屋の友人が東京に来まして「これは明日までに食べよ」と言っていて、あのお饅頭をくれたのです。その後にニュースを見て「ああ、このことを言っているんだな」と分かりました。たぶん、次の日くらいが賞味期限だったのでしょうか。しかし、冷静に考えてみますと、あれは1週間はもちます。北海道のチョコレートも賞味期限が問題になりました。私は1年くらい大丈夫なような感じがしますけれども、いったん火が着いてしまうと、何でもだめだとなってしまふ。いまの豊洲の報道も同じように感じています。

舛添さんのときに、新潟県の県議の人から、「舛添さんは間違っただけですよ。最初に謝ればよかったんです。『私はせこいことをやってしまいました。本当に申し訳ありません』と謝ってしまえば、あんなふうに騒がれなかったのではないですか」と言われたのですが、そうかもしれない。法律違反はしていない」と言ってしまったため、メディアがドツと批判に向かったというところで、メディアは本質を外す場合があるということに、ぜひ注意してほしいのです。

もう一つ、私が日本と海外のメディアの違いを感じた出来事をご紹介します。在欧時代に、デンマークでECの首脳会議が開かれました。取材に行つて、イギリスのサッチャー首相とすれ違いまして、「すぐ威厳のある女性だな」と思った記憶がありますが、それは、それとして、この会議でデンマークの首相が記者会見をしたのです。海に近い倉庫のような会場で、世界中の記者が集まっていたのですが、いきなり若い女性記者が質問をしました。すると、司会の人か「所属会社名とお名前をおっしゃってから、質問をしてください」と咎めました。これは当然のことです。そうしましたら、デンマークの首相がニコニコと笑つて、こう言つたのです。「会社を教えたは必要ありません。名前も言つてくださらなくてけっこうです。ぜひあなたのプライベートの電話番号だけを教えてください」と。女性記者はカナダ人で、23歳くらいの非常にきれいな方でした。「世界中の記者が集まっているところで、首相がこんなことを言えるのはすごいな」と思いました。もし皆さんが新聞記者だったら、これを記事に書きますか。日本の首相がこんなことを言つたら、「不埒だ」、「とんでもない首相の対応である」、「国際的に恥だ」と新聞記事に書かれると思います。ところが、この記者会見の翌日に、向こうの新聞に何か1行か2行でも載っているのかと確かめたら、全く載っていないのです。「さすがだな」と思いました。

つまり、情動的な報道はしていないということです。

そういう意味で、ニュースを受け取るときには、情動的な部分をなるべく排除して、そこにある事実をつかむようにしていかないとはいけません。私も、いまはもう直接取材をすることがあまりなくなりましたから、新聞、テレビに非常に動かされやすい体質になってきてしまっていて、自分自身、非常に危険だと思っています。

情報というのは、その裏に人間がいて、その人間は飢えた狼みたいなの新聞記者で、「特ダネを書きたい、特ダネを書きたい」と思っているわけです。いったんそのルールができると、どんな話でも書いてしまう。豊洲の話は、「何でも書いてしまえ」、「何でも載せてしまえ」という段階から、ようやく多少引いてきた段階ではないでしょうか。皆さんには、メディアから「一気呵成」に溢れ出してくるニュースに惑わされないように、「本当は、どうなのかな？」と一歩引いてみる、情報の受け止め方、ニュースの受け止め方を是非、身に付けていただきたいと思います。

### ◆おわりに

これは今日の講演とは全く関係ないのですけれども、一つだけ申し上げておきたいこと

があります。日本の行方に対して非常に危機感を持っています。簡単に言いますと、日本はこれから、何を輸出していいか分からないということです。これまではメインの商品をしつかりつくって輸出し、稼いできたけれども、これからの日本が一体何で稼ぐのかという、なかなか難しい状況にきていることは間違いなさそうです。

大企業の方や元通産省の方、いろいろな大学の先生などが集まってつくる、ある研究会があります。どうしたら日本をもう一度立て直し、前向きな希望のある国にできるのかといったことを研究し提言する研究会です。私もその会議に出たのですが、資料の一つとして、明治時代の1901年に報知新聞に載った、100年後の未来予測をまとめた記事が配られました。実現している予測もけっこうありますし、明治の人たちが夢にも思わなかったようなことも、技術革新などによって現実のものになっています。これからの日本も、新しい技術や新しい切り口で切り拓いていく必要があるのではないのでしょうか。

長々とお話ししてきましたが、本日はご清聴いただき、ありがとうございます。

(本稿は平成28年9月、新潟県佐渡市において先生が講演された内容を要約し、一部加筆したものです。)

文責 広報部

講師略歴



新井 光雄（あらい みつお）

■現 職 エネルギージャーナリスト  
地球産業文化研究所・理事

■経 歴 元総合資源エネルギー調査会・委員  
元原子力委員会・専門委員

元東京経済大学大学院・兼任講師

■略 1943年 栃木県日光市生まれ

1967年 東京大学文学部化学類卒

1967年 読売新聞東京本社入社秋田支局勤務

1973年 本社編集局経済部エネルギー・金融（日銀などを担当

1982年 ブリュッセル特派員（国際部）

1986年 編集局経済部次長

1990年 編集局解説部次長

1997年 新聞監査委員会幹事

2002年 編集委員

2003年 読売新聞社定年退職

現在に至る

■主な著書

「エネルギーが危ない」（中央公論新社）

（エネルギーフォーラム賞・普及啓発賞受賞）

「電気が消える日」（中央公論新社）

（エネルギーフォーラム賞・優秀賞受賞）

「危機後30年」（電気新聞）

以上